＜論　　文＞

ヘルクナーと労働者問題

面　地　　豊

目　次

Ⅰ．序
Ⅱ．ヘルクナーと労働者問題
Ⅲ．労働者問題と社会改良
Ⅳ．結論

Ⅰ．序

ハインリッヒ・ヘルクナーは，『労働者問題』と題する１冊を著わしている。本稿で取りあげたのは，1902年，全面的に改訂されベルリンで出版された第３版である。

ヘルクナーは，労働者のどのような在り方を問題として取りあげているか。ヘルクナーが「労働者問題」と言うとき，その内容はどんなことがらが含まれているか。ヘルクナーの労働者「問題」の構造は，どのように構想されているか。ヘルクナーは，労働者問題を解決する方法として社会改良について述べている。社会改良は，どのような意味で労働者問題と関連しているか。

本稿の意図は，上に述べた諸問題を明らかにすると同時に，ヘルクナーの「労働者問題」の思考が，経営学的，就中経営社会学的思考の萌芽を含んでいるかどうかを検討することである。換言すれば，ヘルクナーが，「労働者問題」を取りあげ，思考する場合，労働者問題「一般」として思考しながらも，「経営特殊的」労働者問題として思考する要素がそこに含まれていないかどうか，

を検討することが本稿の意図である。そして，労働者問題の「特殊経営的」思考要素がみられるとすれば，それはどのような意味においてであるかを明らかにすることも本稿の意図に含まれる。

Ⅱ．ヘルクナーと労働者問題

ヘルクナーが労働者問題を取りあげる契機の1つとなったのは，先づ，資本主義の発展にともなう工業労働者の人口増加であった。ヘルクナーは言う。「工業労働者の福祉や苦しみは，この階級が国民全体において占める比率が大きければ，それだけ国民にとって大きい重要性を有することは勿論である。資本主義的生産様式の発展した国においては，今や，この部分が常に大きくなっている。農業人口は相対的に減少し，工業人口は相対的に増加している。工業人口の中では，巨大経営の進歩のために従属的労働者（Unselbständigen）の数は年々増加している[1)]」と。資本主義の発展が，国の人口に占める工業人口の比率を大きくしていくことは，工業人口のその国における重要性を大きくしていく。ヘルクナーは，先づ，増加していく工業人口の重要性に着目する。更に，彼は，工業人口の中でも巨大経営における従属的労働者の増加に思考の焦点をしぼるのである。しかしながら，ヘルクナーが労働者を問題として取りあげる基準は，巨大経営における従属的労働者の増加ということだけにあったのではない。ヘルクナーは言う。「今や工業の労働者階級の増加だけでは労働者問題を提供するのには充分ではないであろう。むしろ，この新しい階級が現存の国家－社会秩序において，時代意識に相応した生存を獲得するためには決して充分な基礎を見出していないという状況が基準となった。従って，必然的にこの目標を得るよう努力する運動が形成されねばならなかった[2)]」と。ヘルクナーが労働者問題を取りあげる基準は，工業労働者という新しい階級が，現存の国家－社会秩序において，時代意識に相応した生存をする基礎を充分にもっていないということであった。

1）Herkner, Heinrich : Die Arbeiterfrage. Berlin. 1902, S.3.

2）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.4.

労働者の全生存の基礎は何に依存しているか。ヘルクナーは言う。「労働者の全生存は労働契約の内容及びそれに伴う諸状態（Umstände）に依存している[3]」と。ヘルクナーは，「労働契約の内容とそれに伴う諸状態が労働者の生存を基礎づけるもの」という認識に立ち，そこに労働者問題の中心をみる。労働「契約」は，当然，契約相手を予想するものであり，労働者の生存は契約相手との関係，即ち雇用者との関係において基礎づけられる。換言すれば，労働者の生存は，労働者と雇用者（＝資本家）との「人間関係」において基礎づけられる。ヘルクナーは，労働者問題をこの「人間関係」の中に求めていくのである。ヘルクナーが，労働者の生存が時代意識に相応した基礎をもたないという時，「時代意識」とは，封建時代の古い秩序におけるのとは異なった，新しい時代のそれであり，個人の自由と平等の思想に相応した意識を意味する。この点で，ブレンターノが労働者問題を取りあげた問題状況とヘルクナーの労働者問題の状況とは共通した内容を含んでいる。ブレンターノは言う。「古い秩序を除去し，労働の自由と権利の平等を労働者と雇用者のために宣言するだけでは最早や充分ではない。この自由と平等を積極的に改革することによって保証することが重要となった[4]。」「理論的には，労働者階級が文化の恩恵にあづかる権利や労働者の自由が認識されたが，他方，労働者は生活環境を通して実際にはこの恩恵にあづかることから除外され，他人に依存していた。必然的に，労働者において，現実と彼等の権利を一致させ，独立性を闘い取り，文明の進歩にあづかることを保証する努力が生じざるを得なかった[5]」と。

ヘルクナーは，労働者問題を労働契約の在り方の中に深めていく。労働契約の在り方は，雇用者である資本家と被雇用者である労働者との「人間関係」に依存する。ヘルクナーは言う。「現存の国家－社会秩序においては，労働者は雇用者に対して法的には完全に同等の契約となった[6]」と。しかし，法的同権

3）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.5.

4）Brentano, Lujo : Das Arbeitsverhältniss gemäp dem Heutigen Recht, Leipzig 1877, S.71.

5）Brentano, Lujo : a.a.O.,S.77～78.

6）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.4.

が実際上の同権を保障するものではない。ヘルクナーは言う。「同権をもっている労働者は，労働契約の締結に際しては，まだ，長い間雇用者が享受してきているのと同じ自由を実際もっていない。……契約当事者は，相手よりも本質的に不利を感じることなく相手の提案を拒否することが出来る場合においてのみ契約締結における真の自由が存在するといえるのならば，実際上の自由な労働契約について，一般に語ることは出来ないであろう[7]」と。労働契約において，契約当事者が法的に同権であるが，実際上は，労働者は雇用者と同じに契約相手の提案を拒否する自由をもたない。財産を所有しない労働者は，労働に必要な生産手段を提供してくれる雇用者を見出す時にのみ彼の労働をはたらかせることが出来る。労働契約が成立しなければ，労働者は一般に自己の力で自己の生活を継続する状態にはない。雇用者はこれに対して，労働契約を結ぶことができない場合でも，自己の資本や利子を生活のために利用することが出来る。あるいは労働者の助けなしでも自ら労働することが出来る。労働者は自己の労働力をどんな値段でも投げ売りしなければならず，すて値で大売り出しに文字通りなってしまった破産者の状態につねにある。

労働者の不利な立場は，他方一連の他のモメントによって強化されている。ヘルクナーは言う。「労働力以外の商品は，売り渡した人間の人格から分離された人間の活動の結果を意味するが，労働は人間それ自身の活動であり，労働力商品を売り渡した人間と不可分である。資本を提供し土地を貸し，住宅を賃貸し商品を売る者は，彼の経済生活におけるそれらに相応した成果を得るであろう。しかし，彼の人格は自由である。労働者の場合にはこれと異なる。賃金契約によって労働力を自由に処分出来るようになった企業家は，また，つねに労働者自身の人格に対する一定の自由処分権を得る[8]」と。ヘルクナーのこの思考において，「労働」と「労働力商品」との概念的区別がなされていることに，マルクス経済学の思考の枠組みをみることができる。この意味でヘルクナーは労働者問題を取りあげる出発点において，既にマルクス経済学的思考が基礎にあったと理解される。雇用者は，労働者に労働給付を課することによって，

7）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.5.

8）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.6.

彼は労働者がそこではたらく作業場の温度，空気の性質，災害の危険，協力者などの諸関係において労働者の人格をどのような状態におくかを決定することができる。労働者の立場が労働契約の全締結において不利であればあるほど，労働者は自己の利益の確保はできないのである。

ヘルクナーは言う。「労働力以外の商品はそれ自身のためにでは決してなく，需要状況を考慮することによってのみ生産される。労働力商品は，しかし，需要－市場関係の考慮なしに生きている人間自身とともに発展する[9]」と。労働力以外の商品の価格はその商品の費用を下まわるならば生産を制限し，比較的容易に再びそれに応じた価格が形成される。しかし，労働者の労働があまり要求されず賃金が下がるならば，労働者はどうすればよいか。労働者の所得を生活の必要の水準以上にするためには彼は益々よけいにはたらかねばならないし，またより強力により長時間はたらかねばならない。このことによって労働需要と労働供給の関係は，労働者にとって不利となる。ヘルクナーは言う。「我々の時代の法と道徳は，労働者を人間として，自己目的として認める。他方，現行の経済秩序は，労働者を雇用することが雇用者に有利にはたらくと思われる運命に依存している。しかし，企業者が常に供給されるだけの労働を要求するか，あるいは企業者が労働者に人間的生存を満たす条件の下で雇用する保証は決して依存しているのではない[10]」と。ヘルクナーは，労働者を人間として，自己目的として認める法や道徳と，労働者を人間として，自己目的として認めない現行の経済秩序との不一致を問題とする。特に，巨大経営における労働者の生存の在り方を問題とする意味において，ヘルクナーの思考には経営学的・経営社会学的思考の萌芽をみることが出来る。経営社会学は，経営における労働者の人間としての在り方を問題としているからである。即ち，経営社会学では，経営を労働者の生活空間として捉える。生活は，本質的には労働者＝人間にとって自己目的と理解される。「社会不安の発火点としての経営[11]」「社会不

9）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.7.

10）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.7.

11）Briefs, Goetz : Betriebsführung und Betriebsleben in der Industrie, Zur Soziologie und Sozialpsychologie des modernen Grossbetriebs in der ↗

安の熱い火床としての経営[12]」の認識は，ブリーフスの経営社会学の中心的出発点をなしている。更にまた，ヘルクナーは，労働者が人間として，自己目的として位置づけられない場面の1つとして，労働場所－労働過程の在り方にも注目し，労働場所の気温，空気の性質・災害の危険などの状態を問題として取りあげている。この問題領域は，経営社会学の中心テーマである経営における疎外と深く関わっている。即ち，ブリーフスのいう作業場所の疎外（Verfremdung des Werksraumes）が，この問題領域と関係している。「労働者の仕事場は，人間のためではなく，機械のために建てられた冷たい工場の中にある[13]」とブリーフスは言うのである。ヘルクナーの労働者問題思考は，この点で明らかに経営社会学的思考と結びつきうるものを有している。

労働需要と労働供給の間の不均衡は，また重大な結果をもたらす。労働力は他の商品のような移動性を有していないからである。労働者は，他の商品販売者ほど容易に自己の商品即ち労働力商品に対する最善の市場を形成することが決してできない。労働者は他の場所に移動する手段を所有する時にのみ，他の場所で自己の労働力を最もよく利用する状態にある。しかし，労働者はほとんどそのような状態にはない。労働者はまた，自分の商品の見本を送ることができない。他の場所で前もってある立場を確保できる状態にない。労働者は労働市場の如何なる組織も有していない。ヘルクナーは言う。「契約原則のあからさまな原則，即ち労働力の利用を単に商品市場の法則に委ねる試み，労働力の賃貸し人としての労働者を労働力以外の賃貸し人とを区別するあらゆる特殊性の無視，これらのことは疑いもなく現実の労働関係のおそろしい暴行であり，しかも全くすぐれて労働者の不利になる暴行である[14]」と。

労働者は，労働契約にとってどのような状態におかれるか。ヘルクナーは，工場労働の在り方が労働者の健康に危害を与える状態にあることを指摘する。ヘルクナーは言う。「工場の作業広間において……嫌悪すべき状態が展開され

↘ Industrie, Stuttgart 1934, S.Ⅶ.

12) Briefs, Goetz : a.a.O.,S.Ⅶ～Ⅷ.

13) Briefs, Goetz : a.a.O.,S.25.

14) Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.8.

ている[15]」と。多くの木綿紡績の空気は多くのちりやほこりで充満し，白い綿毛は機械をおおい，床は油，ほこりやあらゆる種類のごみからなる粘着性のあるかたまりでおおわれている。やすり目立工，ガラス搗砕機や陶器工場における労働者は，気管カタル，肺気腫，肺炎などの職業病にかかっている。燐，水銀，鉛，亜鉛，砒素は労働者を最もおそろしく荒廃させている。

労働時間の延長も，工場労働が健康に有害な影響を及ぼす。しかも，労働者に占める子供，未成年，婦人の比率が大きくなればそれだけ悪影響は大きくなる。ヘルクナーは言う。「機械の導入とともに一般に労働時間の著しい延長が現われた[16]」と。労働時間は，設備の資本主義的収益性を高めるために延長された。夜間－休日労働は，技術過程が要求する工場（Betrieb）においてのみでなく，繊維産業，鉱山業においても行なわれている。新しい機械での多くの作業は，大人のしなやかでない手より，子供の敏捷な指の方がうまくいくと考えられ，子供の労働は強く熱望された。女性も常に相当な範囲において生産に参加した。

ヘルクナーは，工場労働と労働者の精神生活との関連についても言及する。即ち，ヘルクナーは工場システムの発展との関連で身体や精神に対する労働の快適さが増大したかどうかを問題として取りあげる。ヘルクナーは言う。「人間をして機械に対する奉仕者におとしめる仕事（Beschäftigung）は人間から人格形成の可能性を奪い，労働の教化的（veredelnd）作業を否定する[17]」と。1年中続く，毎日繰り返される，ほとんど中断されることのない単調労働は，つねに労働者の気分を消沈させる。単調労働は労働者を高める精神労働の機会を与えず，労働のよろこびや人間の能力を労働者から消失させてしまう。ヘルクナーは言う。「しかしながら，労働の性格は，たとえ直接には道徳を危険にさらすことに助勢することがないとしても，労働のよろこびを減ずることはほとんど充分に真面目に評価することのできない悪である。労働時間の短縮も賃金の上昇も，近代的な文化財に対するより大きい関与も，その悪に対する完全

15) Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.15.
16) Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.18.
17) Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.25.

なつぐないを決して表わすものではない[18]」と。ヘルクナーは労働時間の短縮や賃金の上昇ではつぐない切れないものとして，また労働時間の短縮や賃金の上昇とは異なった次元のものとして「労働のよろこび」「労働が人間にとって有している本来の重要性」「労働の人格形成的意味」を重視するのである。ここに，ヘルクナーが労働者問題を取りあげるにおいて，経済学的思考というよりは，社会学的思考のあらわれをみることができる。また，この労働者問題の領域は，ブリーフス経営社会学の中心テーマである労働疎外の問題領域である。ブリーフスは，経営における疎外現象を取りあげ，4つの疎外現象を挙げている[19]。労働疎外はその中の中心的重要性をもつ疎外現象である。ヘルクナーが労働状況を問題として取りあげている領域は，将にブリーフスの労働疎外の問題状況に含まれるものである。ヘルクナーは，仕事（Beschäftigung）は人間形的なものであり，労働は教化的なものであるという認識に立つと，人間が機械に支配されている状態を問題にし，労働のよろこびのない労働状況を悪と断じているのである。

Ⅲ．労働者問題と社会改良

社会改良は，ヘルクナーにとって労働者問題を解決することとほとんど同義である。ヘルクナーは言う。「社会改良は，労働者階級が今日その下で苦しんでいる物質的に劣悪な状態を除去しようとするのみならず，経済的向上の前進の道を開こうとするものである。また，社会改良は，よりよい食事，よりよい住居，よりよい余暇と休養のみならず，労働者をより高い道徳的，精神的水準に引きあげることを目ざすものである[20]」と。ヘルクナーは，労働者階級の物質的に劣悪な状態を除去することを社会改良と結びつけて思考する。資本主義

18）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.25～26.

19）経営における疎外についての詳論は，拙著『西独経営社会学の展開』，千倉書房，昭和55年4月，6頁～14頁を参照されたい。
また，市原季一著『西独経営社会学』森山書店，昭和40年は，経営社会学について詳論されている。

20）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.357.

の発展にともなって工業労働者の人口に占める比率が高まっていく。工業労働者の人口に占める比率の増大は，工業労働者の在り方や問題が，その国において重要な要素となることに関係する。ヘルクナーは，ここに着目して労働者問題を取りあげたことは既に述べたところである。工業労働者の状態をよくすることが社会改良の重要な鍵であり社会を向上させるものであるというのがヘルクナーの思考である。ヘルクナーにとって，社会の発展は経済的なものであるだけでなく，むしろ，社会の道徳的・精神的なものであった。従って，社会改良は，ヘルクナーにとって労働者の経済的状態の向上のみならず，むしろ労働者の精神的・道徳的水準の向上こそがその目標となったのである。物質的条件の向上はそのための基礎とみなされていたのである。

労働者の道徳的・精神的向上をもたらすものは，基本的には労働者自身である。ヘルクナーは言う。「今や，しかし，労働者階級自身の，彼等の向上をめぐる闘い，彼等の公正な問題（Sache）をめぐる長い窮乏の闘いのみが改良の最も価値ある構成要素に属するところの……彼等の浄化と道徳的向上をもたらすことができる[21]」と。ヘルクナーが重視するのは，労働者階級自らが自らの向上のために意欲し努力することである。換言すれば，労働者階級の自主性，独立性こそが，自らの道徳的・精神的向上に導く。近代の労働世界においては他律ではなく自己決定（Selbstbestimmung）こそが中心的重要性を有する。これがヘルクナーの思考である。

ヘルクナーは，労働者問題を全体社会の福祉との関連で思考する。全体の福祉の向上は労働者の政治的権利を結びつけて思考される。即ち，全体社会の福祉は，労働者の政治的参加－自己決定指向と結びつけて思考される。ヘルクナーは言う。「労働者の不充分な経済状態，無教養，社会的従属性，約言すれば，社会改良それ自身を必要とさせているすべてのことが全体の福祉を促進させる政治的権利の正しい行使を問題とさせる[22]」と。「労働者が投票しなければならない場合，労働者が正しい国民教育と労働関係の発展を促進させることを通して共同体生活（Gemeinschaftsleben）の問題に対する関心と理解を得る状

21）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.357.

22）ebenda.

態におかれるように配慮されなければならない[23]」とヘルクナーは考える。ヘルクナーにおいては，労働者の福祉は社会全体の福祉との関連で思考され，全体社会の福祉の向上において労働者が参加するものと構想される。そして，労働者の参加の１つとして，労働者の政治的権利が思考される。労働者の政治的権利の行使が正しいものとなるためには，労働者は共同体生活の問題に対して関心を有し理解を得る状態におかれねばならない。労働者がこのような状態にあるためには労働者が正しい国民教育を受け，また労働関係の発展が促進されなければならないというのである。ヘルクナーにおいては，労働関係が共同体生活との関連で捉えられるのである。ヘルクナーのこのような思考にも，経営社会学的思考の萌芽をみることができる。労働関係が共同体生活との関連で把握されている点である。ブリーフス経営社会学[24]においては，経営生活が労働者の生活の中で構成的重要性をもつものとして把握されている。そして，経営生活が社会生活において重要な要素として把握されている。ヘルクナーの思考において，労働関係は共同体生活との関連で捉えられている。労働関係は経営生活に含まれ，共同体生活は社会生活とほとんど同義であることから，ヘルクナーの思考はブリーフスの思考に結びつきうるものを含んでいる。しかし，ヘルクナーの思考にあっては，労働関係は全体社会との関連で捉えられているとはいえ，全体社会に重点がおかれていると理解される。ブリーフスにあっては，経営生活が全体社会との関連を無視して思考されているのではないが，思考の重点は経営生活におかれている。この点で，ヘルクナーの思考に経営社会学的なものを含んでいるとはいえ，まだ萌芽的なものであると理解される。

ヘルクナーは，社会改良＝労働者問題解決の場として仕事場（Werkstatt）を取りあげる。ヘルクナーは言う。「仕事場の性状（Beschaffenheit）は，労働者の健康，生命，道徳性に対する相応の考慮がなされていない[25]」と。ヘルクナーの眼は仕事場＝経営に注がれるのである。そして，仕事場＝経営の問題に関する改良の１つとして労働者保護法に言及する。ヘルクナーによれば，労

23）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.358.

24）ブリーフス経営社会学については，市原著，拙著を参照されたい。

25）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.368.

働者保護法は次のようなものである。「自由競争の悪しき結果に対して，労働者と企業者を保護している。それは，労働者をして競争の闘いにおいて彼の共同者に労働時間，賃金支払い様式及び一般的職場関係（Werkstattenverhältnisse）に関して安売りさせることを防ぎ，労働者を保護し……この立法は，労働者間での不正な競争を克服しようとする[26]」ものである。社会改良の要素として，労働時間，賃金支払い様式及び一般的職場関係が取りあげられる。これらの要素は，例えば労働時間の短縮は，労働者の精神的，道徳的向上を可能ならしめ，人間の発展を可能ならしめるものとして位置づけられ取りあげられる。ヘルクナーは言う。「労働時間の短縮は，労働者階級の精神的，道徳的向上に対する最も重要な条件である。それは更に……1つの政治的必要性である。……労働者にそれ相応に教育されるべき余暇が与えられないならば，如何にして彼の権利を行使すべきであるか？……労働時間の短縮がはじめて労働者に近代文化の財に対する参加の徐々なる成長，従って，人間の発展の理想的目標に対する接近を許す[26]」と。ヘルクナーは，労働者問題の解決を労働者の人間の発展と結びつけて思考し，労働者の人間の発展は，労働者の権利行使という公的生活をより有効ならしめる民主主義の発展を推進させるものとして把握する。ヘルクナーは言う。「労働者階級の余暇が多くなれば，それだけ彼等は公的機会の進行をより追求し，いたるところで彼等の利益をより成果あるように有効にさせることがわかるであろう。労働時間の短縮は民主主義の発展一般の道への重要な第1歩である[28]」と。ヘルクナーにおいては労働が行なわれる場である「経営」における条件の1つである労働時間の在り方が民主的な「社会」の在り方にとって重視されるのである。

ヘルクナーは，社会改良を雇用者との関連においても思考する。ヘルクナーは言う。「社会改良は，労働者や国家に関係するのみならず雇用者にも関係する[29]」と。ヘルクナーは社会改良には雇用者の主導性によるものがあるという。

26）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.364.
27）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.377.
28）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.383.
29）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.440.

雇用者主導による社会改良には，労働者の自己の成果に対する関心がそれを通して高められて合目的的賃金システム，場合によっては利潤参加が含まれている。利潤参加は「採用された者が彼等の契約された賃金以外に，企業の利潤（Geschäftsgewinn）に対する分け前を得る1つの制度[30]」である。利潤参加は，量的にも質的にも「労働給付の上昇に導き，雇用者に，さもなくばおそらく問題となるであろうところの，従順な労働者に対する秩序ある，持続的支配力が保証される[31]」ものである。この社会改良は労使双方がよく理した利害の中にある。

ヘルクナーは，労働委員会（Arbeiterausschuß）についても言及する。労働委員会は1つの企業の労働者の代表である。その権限は，経営によって非常に様々な幅をもっている。これは，企業を工場秩序の運用のみを支援したり，あるいは労働者と企業者の間を橋渡ししたり，企業内福祉制度が労働委員会に完全にあるいは部分的に委譲されるといった幅をもったものである。ヘルクナーは労働委員会を高く評価する。ヘルクナーは言う。「労働委員会は労働者に友好的な企業者に対して人間的な意図の実現のために有用な救済機関を形成することは全く疑問の余地はない[32]」と。労働委員会は単にそれが存在しているだけで既に多くの利点をもっている。それは，既に生じている労働争議の調停には全く適してはいないかもしれないが，一定の意見の分裂の発生をつねに防ぐことができるかもしれない。労働委員会や利潤参加制度を労働者問題の解決との関連で思考するヘルクナーの構想の中に，経営共同体思考的要素を見ることが出来る。この経営共同体的思考は，経営学的，社会学的思考を基本的に含んでいる。

雇用者の社会改良の中には，雇用者の福祉施設がある。これは，雇用者が労働者に本質的利益を，それに相応した反対給付を受け取ることなく与えるものである。しかし，これはかなり稀である。この場合貧者が問題であり，労働者はしばしば貧者と混同される。ヘルクナーは言う。「労働者問題と貧困者問題

30）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.441.

31）ebenda.

32）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.443.

を識別する基準ほど重要なものはない[33]」と。ヘルクナーは労働者問題と貧困者問題との区別を重視するのである。貧困者は，いたるところで同情的保護や善意による後見を必要とする自己の力では何ごともできない，善意の行為によってのみ助けられる者である。例えば，孤児，病人，高齢で弱っている者，精神薄弱者のことである。労働者は自己の力で生きていく能力や意志，意欲のある人間，即ち自己決定，独立性をもった人間のことである。それ故，労働者は労働者として生きていく限り，不満足の原因をそれ自身にもった者であり，より高い満足を求め，能力を発展させ，意志と意欲に導かれて生きていこうとする人間のことである。ヘルクナーは言う。「社会問題においては，労働者に彼等の生活に充分な物質栄養を与えるだけが問題とされるのではなく，社会改良は，むしろ，巨大な世界史的過程を表わすものであり，社会の新しい層，しかも最も多くの層の向上を意味するものである，という意識に道が開かれてはじめて：その時はじめて，労働者問題と貧困者問題の間の明確な区別が一般的となり，明確に意識される[34]」と。近代的時代意識，独立性と自己決定を求める努力をする人間としての労働者問題の解決は，「我々は善行も善意も決して欲してはいない，欲しているのは我々の権利である！[35]」ということの中に求められる。労働者問題は，我々の全体の経済秩序の結果として現われてきたのであり，雇用者だけが労働関係の発展を満足させていく他の軌道に向けることはほとんどできるものではない。

Ⅳ．結論

ヘルクナーは，労働者問題を取りあげるに際して，資本主義の発展とそれにともなって生じてくる工業人口の増加を先づ視野に収める。工業人口の増加は，特に，資本主義の発展を支え，推進させていく巨大経営における従属的な労働者との関連で捉えられる。巨大経営における従属的労働者の生活の基礎が，時

33）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.446.
34）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.447.
35）Herkner, Heinrich : a.a.O.,S.448.

代意識に相応したものでない。ヘルクナーはここに労働者問題を取りあげる出発点を見出した。この場合，時代意識とは個人の自由と平等の意識を意味している。

ヘルクナーの労働者問題の思考は，マルクスの思想の枠組みから出発している。それは労働力と労働との概念的区別をしていることからも明らかである。ヘルクナーは，労働者問題の場面を労働契約の場面において捉えている。労働契約の当事者の関係において労働者問題を先づ展開する。労働力商品の売買契約としての労働契約において，労働力商品の売り手である労働者と，買い手である企業者＝資本家との関係において，労働者問題が展開されるのである。労働契約の場面での労働者と資本家との関係において，労働者は自由と独立性，平等な立場に立たされていないことが労働者問題の根源である，という認識が先づヘルクナーにとって基礎をなしている。

労働者問題は，労働契約が結ばれる場である経営＝企業において展開される。経営が視野に入れられ，そこでの労働状況が取りあげられる。労働状況は，労働が人間の人格価値を高める内容のものでなく，従って，労働のよろこびのないものであること，作業場所の形成が労働者の人間の都合によってなされるのではなく，経済法則，機械の原理に基づいてなされていることなどが問題として取りあげられる。このようなヘルクナーの労働者問題の取りあげ方やその内容は，ブリーフス経営社会学が取りあげた経営における疎外の現象に属するものである。この意味でヘルクナーの労働者問題思考は，経営社会学的なものを含んでいる。

ヘルクナーの労働者問題の解決の仕方は，全体社会との関連で思考されている。労働者の人間的価値を獲得することが，社会全体の発展と結びつけて思考されているのである。そこには，労働者問題の解決が社会全体の発展にとって重要であるとの認識がある。労働者問題が労働関係において捉えられ，展開されていることは，労働関係の場である企業＝経営の在り方が社会全体との関連で重要である，という明確な認識に手のとどくほどに近いところにある。ブリーフスは，全体社会における経営の重要性を明確に認識していた。この意味でヘルクナーは経営社会学的思考の萌芽を既にもっていたといえる。ヘルクナーに

あっては，どちらかといえば，全体社会に重点があり，ブリーフスにあっては経営に重点があるともいえよう。

ヘルクナーの経営学的思考の萌芽は，利潤参加や労働委員会の構想にもみることができる。ヘルクナーの労働者問題思考は，労働者問題一般思考から，経営特殊労働者問題思考への展開が，萌芽の形で見られるものであろう。このことは，ヘルクナーの思考が経営社会学の生成の１つの源泉でありうることを意味している。